



Title	「民衆派」と「閥族派」は滅ぼさねばならない：ローマ共和政後期における政治状況の理解に向けて
Author(s)	鷲田, 瞳朗
Citation	パブリック・ヒストリー. 2020, 17, p. 75-83
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/76014">https://doi.org/10.18910/76014</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「民衆派」と「閥族派」は滅ぼさねばならない<sup>(1)</sup>

ローマ共和政後期における政治状況の理解に向けて

鷲田睦朗

## 1 はじめに

この国では、国事に携わり、傑出した役割を果たそうとしている人々には二つの党派 (genera) が [常に] 存在する。これらのうち、一方は「民衆派 (populares)」、もう一方は「閥族派 (optimates)」と見なされており、本人たちも実際にそうであることを目指している。自分たちの行為や言動が民衆に気に入られることを望む者たちが「民衆派」で、他方、自分たちの政策が最良の市民に認められるように行動する人々が「閥族派」と考えられている。<sup>(2)</sup>

これは前 56 年にキケロが論じた『セスティウス弁論』の一節で、*populares*「民衆派」・*optimates*「閥族派」というローマ共和政後期における政治状況を示す歴史用語の主要な典拠とされているものである。<sup>(3)</sup> 本稿は、これらの用語が当時の実態を示すために利用されてきたことを問題視するものである。これらの用語は、以下に述べるように研究者における定義も区々である上に、共和政後期が二大政党制的な対立状況にあったとの誤解を生じさせる土壤となつて久しいものであるにも拘らず、人口に膚浅している状況にある。この問題について、安井萌氏は次のように適切に纏めている。

かつてポプラレスとオプティマテスは近代の二大政党制を投影したイメージでもってとらえられた。前者は平民の利害を代弁する「民主党」、後者は貴族の利害を代表する「貴族党」といった具合にである。こうしたアナクロニスティックなイメージは、やがて二〇世紀初頭における本格的なローマ社会史研究の開始とともに揚棄された。貴族と平民の社会対立を背景とした、広範な市民を包摂する（近代的な意味での）「政党」などはローマに

(1) 本論文における略語は、雑誌については *L'Année philologique* に、史料等については S. Hornblower et al.(eds.), *Oxford Classical Dictionary 4<sup>th</sup> edition*, Oxford and New York, Oxford University Press, 2012 (以下 *OCD<sup>4</sup>*) に従った。

(2) Cic., *Sest.* 96. 訳文は、宮城徳也「セスティウス弁護」『キケロー選集 1』岩波書店、2001 年所収。丸括弧内では本稿で扱う用語の原語を、角括弧内では訳文の欠落を補足している。

(3) 古典的理解については、政治用語研究についてのスタンダードである J. Hellegouarc'h, *Le vocabulaire latin des relations et des partis politiques sous la république*, Paris, Publications de la Faculté des Lettres et Sciences humaines de l'Université de Lille, XI, 1963 を参照した。optimates については特に pp. 500-505、populares については pp. 518-541。

存在しない、というのが今や一般的認識となったのである。その後二大政党制のアナクロニズムに対する反動から、また研究者の関心がファクティオ（貴族党派）論へと移行したことから、ポプラレス、オプティマテスの存在はしばらく等閑視されることとなる。しかし一九六〇年代に至りファクティオ論が批判を受け下火となるや、共和政末期の政治史を規定する基本的構図としてその重要性がまたも再認識されるようになった。六〇年代後半以降陸續と現れた関連の諸論考は、両概念の解釈、またその歴史的意味の理解に新たな進展をもたらした。<sup>(4)</sup>

実際のところ、ポプラレス、オプティマテスについては安井氏の理解に特に付け加えることは殆どないように思われる。敢えて述べるなら、シーガーが論じるように、史料における「党派 (factio)」は反乱分子などに対して单数形でしか用いられる事例しかないため、語用論的にも党派理論を「民衆派」と「閥族派」の二項対立の枠組みに当てはめて理解するのは難しいという点ぐらいであろうか。しかしながら、その後に出版された国内外の書籍に鑑みて、「民衆派」と「閥族派」について改めて論じる必要はないとの当初の考えを改めるに至り、本稿を執筆するに至った。これについては、まずロブの著作の刊行によるところが大きい。正直なところ、以前に否定されているテーマに対して、単独著作が刊行されることの意味が最初は理解できなかった。実際のところ、解決済みのように思われていても、サイムが『ローマ革命』で論じた対立の構図の影響が形を変えるなどして未だに残存しており、それをロブが徹底的に否定しつくしたという理解で恐らく間違いないだろう。

翻って国内における歴史叙述ではどうか。共和政期の専門家による研究では、管見の限り、安井氏の論考が踏まえられており、共和政後期を「民衆派」と「閥族派」の対立の文脈で論じる不適切な事例は確認できない。しかしながら、別分野の専門家による論文や帝政期以降の歴史家による一般向け歴史叙述においては、適切でない記述が頻繁に確認される状況である。<sup>(8)</sup>

(4) 安井萌「第七章 共和政末期におけるポプラレスとその政治的手法」『共和政ローマの寡頭政治体制——ノビリタス支配の研究——』ミネルヴァ書房、2005年、291-336頁、292頁参照。同論考は、ポプラレス及びオプティマテスについての適切な理解を示しており、本稿の叙述は同書の成果を前提としたものである。

(5) R. Seager, "Factio: Some Observations", *JRS* 62, 1972, pp. 53-58.

(6) M. A. Robb, *Beyond Populares and Optimates: Political Language in the Late Republic*, Historia Einzelschriften 213, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 2010. H. Mouritsen, *Politics in the Roman Republic*, Cambridge, Cambridge University Press, 2017, pp. 112-123も参照した。

(7) R. サイム『ローマ革命』逸見喜一郎ほか訳、上下巻、岩波書店、2013年。Cf. A. W. Lintott, "Political History, 146-95 B. C.", *The Cambridge Ancient History*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. IX, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 40-103, p. 52, T. P. Wiseman, "Roman History and Ideological Vacuum", in: id., *Remembering the Roman People: Essays on Late-Republican Politics and Literature*, Oxford, Oxford University Press, 2009, pp. 5-32, p. 30.

(8) 枚挙に暇がないので一例だけ挙げるならば、本村凌二『はじめて読む人のローマ史 1200年』祥伝社新書、2014年、146頁「マリウスの軍制改革によって、無産市民の多くが傭兵という職を得、社会は安定しました。民衆の支持を得たマリウスら「民衆派」は、元老院よりも民会を重視した政治への移行を図ります。すると、「閥族派」と呼ばれる名門貴族たちがこれに反対、そのリーダーとなったのがルキウス・コルネリウス・スッラでした。」

この点について、共和政後期を専門とする者によるアウトリーチの必要が認められるを考える所以である。

「民衆派」「閥族派」の解体を課題とする本稿では、まず、これらの用語をめぐる研究状況を概観して、これまでの研究者の定義が多様であったことを確認する。それを踏まえた上で、共和政後期の歴史事項に適切に該当しない両用語を用いるべきでないことを論じたい。

## 2 研究状況の概観

本章では「民衆派」と「閥族派」についての研究史上の位置づけを確認する。ロブが述べるように、これらの用語についての定義は、その重要性にも拘らず、その用法が研究者によって分かれる。<sup>(9)</sup> これは、そもそも史料上、両者の判別が困難なことからきている。モーステン・マルクスが述べるように、キケロが『セスティウス弁護』で長々と両者の違いを述べ立てる必要があったということ自体が、これらの「民衆派」と「閥族派」というラベリングの新規性・独自性を示す必要があったことを示していると言えるかもしれない。ロブもまた『セスティウス弁護』で見受けられる「民衆派」と「閥族派」という見方は正しく創出的」と述べて、キケロのレトリックの産物に過ぎないとしている。<sup>(10)</sup> まずは、この両概念に関する研究状況の確認をしておきたい。

まず、研究者の見解が一致するのは、共和政後期を「民衆派」と「閥族派」の二大政党の対立であるかのように捉えた 19 世紀のモムゼン以来の見解は否定されるべきものであるという点である。また、共和政ローマには、政策や綱領を持ち、持続性の高いという意味での近代的な政党は存在しなかったとされている。更に、ゲルツァーのノビレス支配論から発展したミュンツァーらの党派理論によって明らかにされたように、当該時期のノビレスは一枚岩<sup>(11)</sup> とは言い難く、ノビレス内部での激しい政治闘争が繰り広げられていたとされる。かつては、

(9) Robb, *op. cit.*, pp. 15-33.

(10) R. Morstein-Marx, *Mass Oratory and Political Power in the Late Roman Republic*, New York, Cambridge University Press, 2003, p. 120, p. 212, pp. 230-240, cf. Cic., *Sest.* 96-143. optimates の用例としてはこれが初出であり、populares も政治的な用例としては初出である。

(11) Robb, *op. cit.*, p. 65.

(12) Th. モムゼン『ローマの歴史』長谷川博隆訳、名古屋大学出版会、Ⅲ巻、2006 年、64 頁。またⅡ巻、2005 年、408-409 頁及びⅢ巻 426-427 頁で、モムゼンの党派理解について訳者による説明がなされている。Cf. H. Strasburger, Optimates, in: *RE XVIII*, coll. 773-798. 安井前掲書、292 頁参照。ただしティラーによると、モムゼンの「民衆派」「閥族派」の用法は彼の同時代、19 世紀的なものであり、これを現代的な用法で捉えることが誤解の元であるとされる。すなわちモムゼンの Partei は近代政党とは異なるものと理解されるべきであるとのことである。L. R. Taylor, *Party Politics in the Age of Caesar; Sather Classical Lectures vol. 22*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1949, p. 12.

(13) F. Münzer, *Römische Adelparteien und Adelsfamilien*, Stuttgart, F. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1920.

(14) K. Hopkins, G. Burton, "Political Succession in the Late Republic (249-50 B. C.)", in: K. Hopkins, *Death and Renewal, Sociological Studies in Roman History, vol. 2*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983, pp. 31-119. この状況については、以前、思想史的観点から確認している。鷺田睦朗「インゲニウム考——ローマ共和政後期における「競争的な政治文化」との整合性を中心に——」『待兼山論叢』史学篇 48, 2014 年、51-76 頁。

ノビレス全体と「閥族派」とを等閑視する見解も存在したが、このような研究状況から、現在の研究レベルではノビレス全体を「閥族派」とみなすのは困難となっている。また、主要な「民衆派」も「閥族派」と社会階層的に相違ないノビレスなどに属することも指摘されている。<sup>(15)</sup>

これに代わって現れたのが、ノビレス内での政治手法・基盤の違いとみなす見解である。すなわち、元老院の権威に依拠する「閥族派」と民会を扇動して影響力を行使する「民衆派」との理解である。<sup>(16)</sup>この見解は現在通説的になっており、個別研究レベルでは問題ないようと思われる。しかしながら、以前の研究で明らかにしたように、有産者に有利とされてきたケントゥリア民会で開催されていた高位公職選挙の結果にさえも一般民衆の投票が影響していた当時の政治状況を踏まえると、いかなるノビレスといえども、民衆の支持を得る必要のない政治家は当該時期に存在しなかったように思われる。ノビレスや「閥族派」と目される人々が元老院の権威だけで政治を牛耳れたという理解は最早成立しえないと見えよう。<sup>(17)</sup>

キケロの執政官選挙に際して、弟クィントゥス・トゥッリウス・キケロが書いたとされる『選挙運動備忘録』に、「我々が常に国事において、オプティマテスと同意見であると（選挙民に）思われるよう、決してポピュラリストだと思われないように」とある。キケロのような新人家系の政治家が選挙で勝つためには、既存の政治エリートの反感を買わぬようにする配慮をしつつ、他方で民衆の好意も勝ち得なければならなかつたのである。<sup>(18)</sup>ある意味、現代政治と同様、レトリック上で対抗相手を批判する際にポピュリスト呼ぼわりすることは間違いなく存在した。しかしながら、全てのポピュリストが同じ党派に属したり、連携して活動していたりしていたというわけではなかつたと考えるのが適切な理解と言えるのではないだろうか。とするな

(15) ノビレスも研究者により定義が分かれる難しい概念ではあるのだが、ここでは深く立ち入らず、単純に有力政治家としておく。ここでは、安井前掲書「序章 ノビリタス支配をめぐる学説史と論点」1-30頁を挙げるに留める。

(16) 1949年に刊行された *OCD* の初版においては、閥族派は「共和政後期における保守的な政治グループ A conservative political group in the later Roman Republic」であるとされ、血縁貴族でも政党でもなく、富・影響力・能力を持った元老院の少数家系の成員、事実上、ノビレスと呼ばれる政治エリートと同一視されていた。P. Treves, "Optimates", in: *OCD*, Oxford, Clarendon Press, 1949, p. 624. 最新版の第4版（内容は第3版から変更無し）でも閥族派はノビレスと等閑視されており、研究成果のフィードバックが遅れていることが確認できる。E. Badian, "Optimates, Populares", in: *OCD*, Oxford and New York, Oxford University Press, 1996, pp. 1070-1071 (=id., "Optimates, Populares", in: *OCD*, pp. 1042-1043). Cf. id., "Optimates, Populares", in: *OCD*, Oxford, Clarendon Press, 1970, pp. 753-754.

(17) 例えば、安井前掲書、298-299頁。

(18) 鶴田睦朗「ローマ共和政「最後の時期」における高位公職選挙——ケントゥリア民会の制度とその運用状況から——」『西洋史学』199号、2000年、44-60頁。

(19) Cicero, *Comment. pet. 5*. このテクストの真偽には長い議論があるものの、他の史料との矛盾もなく、少なくとも当時の状況を良く反映しているとは評価できる。Cf. J. G. F. Powell, "Commentariolum petitionis", in: *OCD*, p. 359. A. Yakobson, *Elections and Electioneering in Rome: A Study in the Political System of the Late Republic*, *Historia Einzelschriften* 128, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 1999, p. 24, pp. 74-75, p. 103.

(20) 民衆の好意を如何に獲得すべきかという点については、Cicero, *Comment. pet. 41* 以下で述べられている。Cf. Yakobson, *op. cit.*, passim.

らば、従来の研究で示されてきたように政治手法・基盤で政治家を「民衆派」などと区分する意義があるのかについては、いささか疑わしいように思われる。

もう 1 つ、思想史的なアプローチからの理解がある。これは別稿でも簡単に述べたように、自由などに対する政治イデオロギー的な立場とするものである。すなわち、共和政後期において「国家における自由」を述べる弁論のレトリックに 2 つの「型・流儀」を認めるものである。かつての王のような「強大な一者に脅かされない自由」を「閥族派」的とみなし、「民意が選ぶ(のであれば強大な一者の存在も認めざるを得ないとする)自由」を「民衆派」的なものとするものである。<sup>(21)</sup> さらに、「民衆派」的演説の扇動性を指摘する向きもある。<sup>(22)</sup> その際、ティベリウス・センプロニウス・グラックス、ガイウス・センプロニウス・グラックス、ルキウス・アップレイウス・サトゥルニヌス、ブブリウス・スルピキウス・ルフスら雄弁な護民官の「四大ポプラレス」が例示される場合もある。<sup>(23)</sup>

しかしながら、このような派手な演説は、当時の演説のスタイルの 1 つとしてキケロが述べるところのアジア式演説でしかないのではなかろうか。例えば、サトゥルニヌスの「言うべきことの多さや節度ある聰明さによってというよりも、外面や動作、外衣そのもので人々を引き付けていた」<sup>(24)</sup>スタイルはアジア式演説の特徴とされるものである。またスルピキウスについて、キケロは「きわめて莊重で、言うならば悲劇役者の弁論家」と述べている。<sup>(25)</sup>

もし「民衆派」的とされる演説がアジア式演説であるという想定が妥当であるならば、クィントウス・ホルテンシウス・ホルタルスが格好の反例となる。<sup>(26)</sup> 若い頃に演説の名声を獲得した彼は、政治的には一貫して「閥族派」的な立場を取っていたと評価されている。そのホルテンシウスは民衆受けする派手なパフォーマンス的演説を行っていたことが知られている。彼の事例から、扇動的な演説スタイルが「民衆派」独自のものでないことは明らかであろう。キケロ自身が親近感を持っていた平易なアッティカ式演説、折衷的とされるロードス式演説などと同様に、アジア式演説も民衆に働きかけ、共感や支持を得るために行われたものであるが、派手な政治パフォーマーを尽く「民衆派」とラベリングすることは困難であると言わざるを得ない。

では、演説の政治的内容についてはどうだろうか。ローマには一貫した政策に基づく政党は

(21) 鶴田睦朗「古代ローマにおける市民権と自由」田上孝一編『権利の哲学入門』社会評論社、2017 年、28-41 頁、32 頁。Cf. Ch. Wirszubski, *Libertas as a Political Idea at Rome during the Late Republic and Early Principate*, Cambridge, Cambridge University Press, 1950, V. Arena, *Libertas and Practice of Politics in the Late Roman Republic*, Cambridge, Cambridge University Press, 2012. 安井前掲書、318-323 頁。

(22) E. g., S. Roselaar, "Reviewing Valentina Arena, *Libertas and the Practice of Politics in the Late Roman Republic*", *The Ancient History Bulletin Online Reviews* 3, 2013, pp. 45-47, p. 46.

(23) 例えば、安井前掲書、302-310 頁。

(24) 安井前掲書、303 頁。

(25) Cic., *Brut.* 224.

(26) Cic., *Brut.* 203.

(27) Quintus Hortensius Hortulus (114-50 BCE)、前 69 年度コンスル。キケロが弁論家としての地位を確立するまではローマにおける弁論の第一人者とされていた。彼については差し当たり、F. von der Mühl, "Hortensius Hortulus 13), Q.", in: *RE*, VIII 2, coll. 2470-2481。彼のアジア的演説については Cic., *Brut.* 325-327.

無かったとのドグマにも拘らず、演説の内容から「民衆派」の特徴を抽出するという論理形成には目を瞑ろう。それにしても、ガイウス・グラックスが民衆の為に行動した「典型的な民衆派」と目される一方で、キャリア形成のために民衆を利用しただけの、彼に続く「民衆派」とは一線を画した例外的な存在であるとされているという、ロブが先行研究を踏まえて指摘した問題が残る。<sup>(28)</sup> この問題を考える上で看過してはならないのは、同時代・共和政後期のラテン語史料におけるグラックス兄弟に対する低い評価が、帝政期に入ってからのギリシア語史料において俄かに肯定的なものに転じている点である。<sup>(29)</sup> この例外を「民衆派」の典型と位置付けることには疑問を抱かざるを得ない。

確かに、市民権付与や農地分配、食糧供給を始めとする政治問題が演説で取り上げられたことは間違いない。しかしながら、管見の限り、「閥族派」の代表格の1人と目される小カトーが前62年に食糧供給の規模を拡大させたことが、「民衆派」的文脈で論じられることはないように思われる。<sup>(30)</sup> ある意味、クロディウスに先駆けて、グラックス兄弟よりも食糧供給システムの変化に大きく寄与した小カトーが「民衆派」とラベリングされないのは恣意的な史料操作とは言えないだろうか。

ここまで概観してきたように、「民衆派」と「閥族派」の定義は定まっておらず、また一見妥当であるように思われてきたものにも例外が散見されるという状況である。簡単に纏めると、①「民衆派」「閥族派」は政党ではない。②一枚岩でないノビレスは「閥族派」足りえない。③民衆の支持を必要とするのは「民衆派」だけではない。④派手なパフォーマンス的演説を行うのは「民衆派」だけではない。⑤当時の政治課題に対して、大きな変化をもたらしたのは「民衆派」だけではない。これらの結果を踏まえて、共和政後期についての歴史叙述における両用語の使用について考えたい。

### 3 共和政後期についての歴史叙述にむけて

ローマの歴史は大きく王政期、共和政期、帝政期に分けられる。共和政の伝承上の開始は前509年、終焉については諸説あるが、前27年のオクタヴィアヌスのアウグストゥス称号獲得辺りとされる。共和政期内については、画期をどのように設定するかにもよるが、最後の時期

(28) Robb, *op. cit.*, p. 15. ロブがここで挙げている先行研究は、Taylor, *op. cit.*, p. 21, Chr. Meier, “Populares”, in: *RE*, Suppl. X, 1965, coll. 549-615, col. 557; P. A. Brunt, *The Fall of the Roman Republic and Related Essays*, Oxford, Clarendon Press, 1988, p. 33. Cf. H. van der Blom, *Oratory and Political Career in the Late Roman Republic*, Cambridge, Cambridge University Press, 2016, pp. 105-108.

(29) 合阪學「グラックス像の形成」『西洋史学』90号、1973年、1-19頁、特に14-19頁に附せられた表を参照。ただし、合阪はポプラレスの伝承を基にし、イタリア理念を軸にしたローマ史叙述の連続性を論じている。

(30) ガーンジイは小カトーによる受給者数を10-20万人と評価している。P. ガーンジイ『古代ギリシア・ローマの基金と食糧供給』松本宣郎・阪本浩訳、白水社、1998年、276頁。プルタルコスによると、年額1250タラントにものぼる政策をカトーが提案したのは、カエサルが扇動した民衆を恐れたからであるとのことであるが、この理由づけには疑問が残る。Plut., *Cat. Min.* 26.

(31) 歴史叙述と時代画期との関係については、Mouritsen, *op. cit.*, pp. 106-108も論じている。

を前 133 年のグラックス兄弟の改革、或いは前 146 年のカルタゴ市の陥落からとすることに大きな異論はないように思われる。一般的には、この時期は共和政末期と呼ばれているが、当該時期の安定的・持続的側面に着目する立場から、共和政後期と呼ぶのが妥当ではないかと考えている。しかしながら、グラックス兄弟に始まる「内乱の 1 世紀」を混乱した「末期」と捉える見方の方が通説的理説であると言わざるを得ない。<sup>(32)</sup>

しかしながら、このような見方の前提は、現在の研究レベルでは既に過去のものとなっている。マルクス主義史観の影響を受けていた前 2 世紀以降のラティンディウム(大土地所有)制の展開についての研究はアナクロニズムの所産であることが示されている。当該時期の経済状況は、以前論じたように、大消費地であるローマ市に志向した生産地が発展した時期でもある。<sup>(33)</sup> 土地の所有形態を中心とした経済的条件の変質が政治環境の変質を齎したとは言い難い状況である。また軍事史の観点からも、「マリウスの軍制改革」以降の「職業軍人化」「私兵化」<sup>(34)</sup> の強調を否定的に捉え、「市民としての兵士」という側面が注目されていることである。<sup>(35)</sup>

では、共和政後期の対立も含めた政治状況をどのように叙述すべきかという問題であるが、少なくとも二大政党制的な理解に繋がりやすい「民衆派」「閥族派」という用語を積極的に用いる理由は存在しないように思われる。むしろ、グラックス兄弟以降のローマ政治を二大政党の対立であるかのように誤解される虞しかないだろう。共和政期の専門家以外が書いたローマ共和政後期についての誤った歴史像が流布している現状を踏まえると、これらの誤解を生みやすい概念の使用は控えるべきではないだろうか。

共和政後期当時の状況を端的に言えば、ローマ政治の遂行には民意の獲得が必須となっており、その為にポピュリズム的なパフォーマンス政治家が頻繁に現れるようになったということであろう。そのようなパフォーマンスが過激化した結果、ローマ市内での騒乱や新たな政治問題の発生といった事態が生じたので、そのような行為は白眼視され、それと差別化するためのレトリックとして良識派・「普通のローマ人」<sup>(36)</sup> くらいのニュアンスでオプティマテスという力

(32) サッルスティウスに遡る、カルタゴ陥落以降のローマ没落という史観については、合阪學「(解説)『没落への危機に立つローマ——サッルスティウス『カティリーナの陰謀』を読む——』C. サッルスティウス=クリスプス『カティリーナの陰謀』合阪・鷺田翻訳・註解、大阪大学出版会、2008 年、129-155 頁、136-137 頁。Sall., *Cat. 10*。また合阪學「没落観念と普遍史叙述——ポリュビオスからポンペイウス=トローゲスまで——」『西洋史学』128 号、1983 年、1-17 頁。

(33) 例えば、松本宣郎「ローマ史概説」伊藤貞夫・本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会、1997 年、130-142 頁、133-136 頁、島田誠「共和政末期の内乱とクリエンテーラ」伊藤・本村前掲編書、154-156 頁、砂田徹「共和政末期の混乱」松本宣郎・前沢伸行・河原温共編『文献解説 ヨーロッパの成立と発展』南窓社、2007 年、67-70 頁。

(34) その動向については、鷺田睦朗「『音楽堂のウィッラ』とウィッラ経済の進展——ラティンディウム論再考——」『パブリック・ヒストリー』13 号、2016 年、146-177 頁を参照されたい。

(35) この点については、ワインを題材として既に論じている。鷺田睦朗「ローマ期イタリアにおけるワイン产地ブランドの誕生」『古代文化』57-9 号、2005 年、28-40 頁。

(36) 砂田徹『共和政ローマの内乱とイタリア統合——退役兵植民への地方都市の対応——』北海道大学出版会、2018 年、16 頁、20-21 頁。

(37) ネット右翼と目される人たちが自称する「普通の日本人」との言い回しを踏まえた比喩。為念。

テゴリーをキケロが設定し、法廷などの多数派形成を行ったということであろう。

私の言う「最良の市民」とは誰のことか、と君は聞くのか。もし君が「数はどのくらいか」と問うなら、「数え切れない」と答えよう。そうでなかったら、私たちは存続し得ないであろう。国政の第一人者たち、彼らの考えに賛同する人々、元老院議員への道が開かれている第一級の改装に属する人たちはもちろんのこと、都市部や農村部の各地域に所属するローマ人、事業者や解放奴隸にも「閥族派」はいる。先に述べたように、その数はきわめて広範囲にさまざまな階層にわたっている。だが、誤解を避けるために党派全体の範囲を絞り、簡潔に定義することもできる。罪を犯しておらず、将来の邪悪さとは無縁で、気が狂っておらず、家庭争議に悩まされていない者は皆「閥族派」だ。それゆえ、清廉潔白で、正気を保ち、家庭もよく収まっている人なら誰でも、君の言う「家柄」に属することになる。行政に携わるにあたり、これらの人々の要望と利益と信条に奉仕する人たちが、閥族派の擁護者で、自らも最重要の閥族派、最も高名な市民にして国家の第一人者と認められるのだ。<sup>(38)</sup>

法廷でセスティウスを首尾よく弁護するために、キケロは長々と「閥族派」の説明をすることで、現場の「普通の」聴衆に訴えかけて、陪審人たちに影響を及ぼすような好反応を得ようと努めている。言説的には「民衆派」ではなく「閥族派」を称揚しているのだが、その行為は「民衆派」的である。このような実態を踏まえると、「民衆派」「閥族派」という当時の政治演説での文脈では有効であったであろうラベリングを真に受けて、分析概念として用いるのは単なる言葉遊びでしかないと言っては言い過ぎになるだろうか。

政治問題が顕在化する都度に現れてくる不満分子、反対派に対して便利使いされたラベリングに惑わされて、その都度その都度の反対派を一貫した政策を持った集団だと捉えることは、その時々の反対派の個別性を看過せることになりはしないだろうか。「民衆派」と十把一絡げにしてしまうよりは、マリウス・キンナ派、カエサル派などのように別個に論じるべきであろう。当然ながら、個々の「民衆派」に対抗して一時的に野合しただけの体制派側も「閥族派」などと呼ばず、その時々の事情に応じてスッラ派、ポンペイウス派、反カエサル派などと呼ぶべきであろう。

更に、政界渡り鳥的に「宗旨替え」をしたかのように捉えられて、その政治性を軽視されがちなポンペイウスやキケロに対する評価も変わってくるかもしれない。キケロは、コンスルになるまでは「民衆派」で、その後に「閥族派」となったと目される場合がある。ポンペイウスに至っては「閥族派」スッラ麾下の將軍として現れ、彼の死後も軍事的活躍した為に他の「閥

(38) Cic., *Sest.* 97. 訳文は、前掲宮城訳。

(39)もちろん、専門研究において彼らの政治性は認められているのであるが、例えばキケロが政治家として見られない傾向が強かったことについては、C. ハビヒト『政治家 キケロ』長谷川博隆訳、岩波書店、1997年が縷々論じたところである。

族派」政治エリートから距離を置かれ、カエサルらと手を結んで「民衆派」となり、その後、カエサルが力をつけたために彼と対抗すべく「閥族派」へと返り咲くことになる。等々。余計なラベリングが存在しているために、かえって理解が及びにくくなっているようにしか思われない。「内乱の1世紀」に生じた個々の將軍間の争いは、二項対立の枠組みに落とし込むのではなく、その都度の背景に即して理解するべきであろう。

本論冒頭の引用箇所で通説的な理解に基づいて「党派」と訳出されている *genera* も、本来の文脈では「種類」「タイプ」程度の意味合いでしかない。ローマに近代的な意味での政策集団としての政党は存在しなかったという共通理解がある以上、積極的な理由がない限り、誤解の元となりやすい両用語を敢えて使う必然性は無いのではなかろうか。シーガーが「<sup>(40)</sup>「民衆派」の亡靈が未だに巧みな変装で残っている」と論じてから半世紀近く経ているのだから、そろそろキケロやサッルスティウスのレトリックを相対化すべきであろう。

#### 4 おわりに

近年、高校の歴史教育の改変が取りざたされている。伝え聞くところでは、「歴史総合」では前近代史の割合が激減するとか、「世界史探求」でも従来とは異なるカリキュラムが導入されることである。これまででさえ、歴史教育においてはヨーロッパ中心主義的傾向が強すぎると批判される印象がある。このような状況の中で、歴史用語の数を厳選すべきという意見がある。学生の学習時間や学習効率との兼合いを考慮すれば、傾聴に値するように思われる。であるならば、本論で取り上げた「民衆派」「閥族派」などといった誤解を生じかねない用語は、真っ先に削除対象となって然るべきものかもしれない。他分野は兎も角、少なくとも共和政期ローマについての歴史叙述については、史料的制限が厳しかった為に、史料的根拠が弱い、近代の研究者による枠組み的な分析概念が多く用いられていたことは否めない。<sup>(41)</sup> しかしながら、ここ半世紀に発見された考古史料によって、共和政期ローマの歴史像は大きく変貌している。そのような新しい知見を盛り込むことが望ましい以上、邪魔な亡靈にはご退場頂かねばならないだろう。

ここまで述べてきたように、歴史教育の変換が要請されている昨今の状況を奇貨として、「民衆派」や「閥族派」、ラティフィンディウムなどといった不要な歴史用語を減らして、共和政期についての歴史叙述を一新するべきではないだろうか。このような観点からも、ともあれ、「民衆派」と「閥族派」は減ぶべきであると考える次第である。

(40) R. Seager, "Cicero and the Word *Popularis*", *CQ*, 22-2, 1972, pp. 328-338, p. 328.

(41) 例えば、帝政期でもモムゼン由来の「ドミナートウス（専制君主制）」を専門研究レヴェルで考え無しに用いることを良しとする研究者は現在いないであろう。